

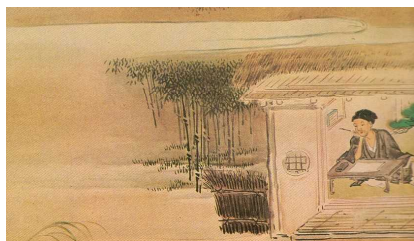
《令和五年 暗唱②》

ほうじょうき  
方丈記

かもちょうめい  
鴨長明

ゆく河の流ながれは 絶たえずして、  
しかも もとの水みずに あらず。  
よどみに浮うかぶ うたかたは、  
かつ消きえ、かつ結むすびて、久ひさしく  
とどまりたる ためしなし。  
世よの中なかの 人ひとと すみかと、  
また かくのごとし。

いま  
今から800年ねん以上いじょう前まえに書か  
かれたお話はなしです。今いまの言葉ことばで  
の説明せつめいは下したにあります。



ほうじょうき  
方丈記 (現代語訳)

流ながれていく川かわの流ながれは絶たえることが  
なく、それでいて (その水みずはどんどん  
うつりかわって) もとの同おなじ水みずではな  
い。(川かわの) よどんだところに浮うかぶ水みず  
の泡あわは、こっちで消きえ(たかと思おもうと)  
そっちにできて、いつまでも同おなじ(泡あわ)  
だということはない。世よの中なかに生いきて  
いる人ひとと (その人ひと) 住すんでいるとこ  
ろ (との関かん係けい) は、ちやうど (川かわの流なが  
れや水みずの泡あわ) 同おなじようなものである。